【資料紹介】

中村地平「将棋随筆」初出誌・初出稿

本多俊介

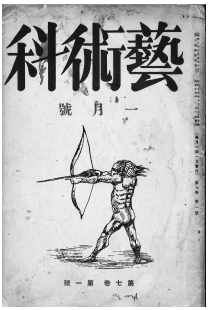
昭和初期から四〇年代にかけて主に中央線沿線在住の文士たちが断続的に集った「阿佐ヶ谷会」は、戦前戦中は井伏鱒二を中心とした将棋会としての性格が強く、事実ひと頃は「阿佐ヶ谷将棋会」として開催された。

彼らの将棋熱を語る上で、〈「いったい僕たちはなにを楽しみに生きてゐるのであらう」（略）「そりやあ将棋があるからさ」〉という会話を記した中村地平[1]の「将棋随筆」は欠かせない。阿佐ヶ谷会に関する文章を網羅した『「阿佐ヶ谷会」文学アルバム』（青柳いづみこ・川本三郎監修、幻戯書房、二〇〇七年、以下『文学アルバム』）をはじめとした文献に掲載・引用されているが、これまで初出媒体は不明だった。『中村地平全集』第三巻[2]（皆美社、一九七一年）が底本とした『随筆・評論　仕事机』（筑摩書房、一九四一年）には初出媒体に関する記述はない。

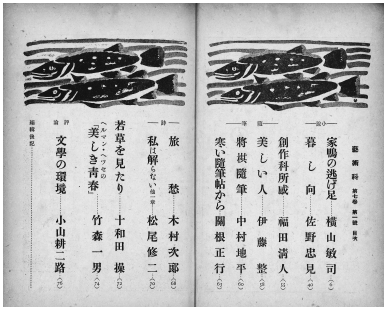
その「将棋随筆」の初出が『藝術科』一九三九（昭和一四）年一月号と判明したので紹介する。

初出誌発行時期から、『仕事机』収録稿の末尾に加筆された〈（十三年十二月）〉は、執筆時期と考えられる。『文学アルバム』の〈「阿佐ヶ谷会」開催日一覧〉（萩原茂作成）によると阿佐ヶ谷将棋会は一九三八年三月三日に初開催され[3]、同年だけで三回を数える。「将棋随筆」は文士たちの将棋熱の真っ只中に書かれた。

初出誌の『藝術科』は、日本大学芸術科（現芸術学部）が発行した文芸雑誌である。奥付によると、創刊号は一九三二（昭和七）年一二月二五日に発行。発行所は〈日本大学〉で発売所は春陽堂と第三書院。定価三〇銭で市販された。第二号は一九三三年二月一日発行で、発行所は〈日本大学「芸術科」[4]〉。定価は二〇銭だった。当初は不定期刊でのちに月刊となった。終刊は不明。日本近代文学館の所蔵は一九四〇（昭和一五）年一一月号（第八巻第一一号）までだが、それには終刊の気配はない。曽根博義（執筆当時、日本大学教授）の「日本大学芸術科の雑誌『芸術科』文献渉猟15」（『国文学　解釈と教材の研究』〈学燈社、一九九九年一月号〉）によると、〈確認し得た最後の号は〉同年一二月号という。後継誌の「新藝術」創刊号[5]発行



『藝術科』
1939年1月号
表紙および目次



は一九四一（昭和一六）年二月一日なので、『藝術科』終刊は一九四一年一月号である可能性も残っている。

創刊号の「編集雑記」には新興芸術派の作家であり、芸術科で教鞭を執った久野豊彦が〈よき作家、よき編集者をこの雑誌から産みだすところに、本誌の目的がある〉と記した。日大芸術科は傘下に専門部創作科、美術科のほか計五分科を置いたが、『藝術科』は実質的には創作科主体の文芸雑誌だった。創刊号では、戦後は毒舌評論家として活躍した十返肇が本名の「十返一」で執筆した「踵の無い社会」が目を惹く。十返が師事した新興芸術派の吉行エイスケもどきの都会派小説である。

『藝術科』からは、芸術科在籍者による二つの芥川賞候補作が生まれた。一九三八年一二月号掲載の第八回（一九三八年下期）候補の吉川江子「お帳場日誌」と一九四〇年一月号掲載の第一一回（一九四〇年上期）候補の元木国雄「分教場の冬」である。第一一回の候補には芸術科出身の池田みち子の「上海」（『三田文学』一九四〇年五月号）も挙げられた。評論、随筆では川端康成、龍胆寺雄、中河与一、伊藤整、上林暁らが寄稿した。

在学生の創作の舞台となった『藝術科』は、今をときめく日大芸術学部文芸学科の原点ともいえるが、『新藝術』ともども『日本近代文学大事典』（講談社、一九七七年）には立項されていない[6]。『藝術科』は国立国会図書館には所蔵されておらず、日本近代文学館とCiNii（NII学術情報ナビゲータ［サイニィ］）では、全号は確認できない。立項に値しなかったというより、そのための資料に乏しかったというのが理由ではないか。唯一現存が確認できる同館所蔵の『藝術科』創刊号は二〇一七年に曽根（一六年没）の遺族から寄贈[7]されたばかりだ。

「将棋随筆」初出誌の【H・K】による「編集後記」には〈真情の溢れた「創作科所感」を首め「美しい人」「将棋随筆」の三文章を福田、伊藤、中村の三師から寄せられたのは嬉しい〉とある。福田清人ら芸術科教員が寄稿したことがわかる。中村は一九三八年四月から四四年三月まで日大芸術科の非常勤講師[8]を務めた。

筆者の中村地平は、宮崎市で肥料問屋を営む旧家の次男として出生。佐藤春夫の台湾に関する小説の影響で南方にあこがれ、台湾の台北高校に進学。東京帝国大学文学部で同期の太宰治と共に、井伏鱒二門下の俊英として頭角を現した。太宰とは『日本浪曼派』の同人になった経歴も重なる。東大大学院を一年で中退、都新聞（現東京新聞）に約二年半勤めてから創作活動に専念するために退社した。「南方文学」を提唱し、台湾や郷里の庶民生活を飾り気なく描いて芥川賞候補に三度（「土龍（もぐら）どんもぽつくり」〈『日本浪曼派』一九三七年五月号〉＝第五回〈一九三七年上半期〉、「南方郵信」〈『文学界』一九三八年四月号〉＝第七回〈一九三八年上半期〉）、「八年間」〈『群像』一九五〇年一〇月号〉＝第二四回〈一九五〇年下半期〉）挙げられた。終戦前に郷里に戻り、宮崎県立図書館館長や、父常三郎が初代社長を務めた宮崎相互銀行（現宮崎太陽銀行）二代目社長などを歴任する傍らで執筆活動を続けるも、病のため職を辞し、五五歳で亡くなった。

新刊で流通している現役の単著はないが、太宰や坂口安吾との交友からも忘れ難い存在である。安吾死去の翌月に書かれた「安吾さんの狂気」（『日向日日新聞〈現宮崎日日新聞〉』朝刊、一九五五年三月二四日・二五日付および『熊本日日新聞』夕刊、三月二三日・二四日付〈発行は日付の前日〉[9]）には〈太宰治も、ひところモルヒネ中毒のために、狂気に近い状態にあった時代がある。そのころ、僕は毎日のように太宰に会い、毎日のようにケンカしていた。そんな僕をみると、安吾さんは、／「あんな奴とつきあう君はバカだよ。あんな奴は遠くから作品をみていればいいんだよ。」／　と、いっていた〉とある。つきあいの深さから「将棋随筆」に両人が登場するのは腑に落ちる。

「将棋随筆」初出稿は、次の通り。原則として漢字は旧字体を新字体に置き換え、旧仮名遣いを用いた。

将棋随筆

中村地平

今、若い文学者の間では将棋が非常な勢ひで流行してゐる。特に中央沿線ではそれが甚だしく、荻窪から阿佐ケ谷、高円寺辺りに無数に住んでゐる青年作家のなかで将棋を指せないのは僅かに中谷孝雄氏一人くらゐなものではないだらうか。

つい先達、小田嶽夫氏と会つた時

「いつたい僕たちはなにを楽しみに生きてゐるのであらう」

と、いふ話がでた。そしてそのとき僕たちが異口同音に叫んだのは

「そりやあ将棋があるからさ」

といふ言葉であつた。先輩や戦友たちが戦場で血をながしてゐる非常の時代に、のん気な話題で大変申しわけもないが、先づゴシップめいた僕たちの将棋熱といへばこれくらゐに猛烈なのである。

僕たちの将棋振興に与かつて力があるのは、阿佐ケ谷会の存在である。

阿佐ケ谷会といふのは、阿佐ケ谷を中心とする中央沿線に住まふ若い文学者が、不定規[10]に集まつて酒をのんだり、無駄話をする会合である。幹事は小田嶽夫に外村繁の両氏であるが、この会でときをりヘボ将棋の会を催して、会員の技倆に等級をきめるのである。常連の顔ぶれを挙げてみると、

井伏鱒二、古谷綱武、浅見淵、尾崎一雄、緑川貢、木山捷平、太宰治、小田嶽夫、田畑修一郎、亀井勝一郎[11]　塩月赳

などの諸氏である。そして、技倆もだいたいこゝに並べた名前の順序のとほりである。

年齢や文学的経歴から云つてもこの仲間ではもちろん井伏氏が大将格であるが、将棋でもまた同様である。外村氏は幹事であることを強調して、勝負に加はつたことがない。成績表を貼つたり、名前の上に白星や黒星を書きこむ雑事の役目を引き受けてゐるのであるが、万一勝負に加はつたとしても最下位の地位に甘んじなければならないであらう。時に飛び入りといふ格で、安成二郎氏や平野零児氏等が加はることもあるが、年齢の点からいつても技倆の点からいつても安成氏は別格で、われわれとはかなりの距離がある。

この会では、二回ばかり将棋の大会を催したことがある。井伏氏が直木賞[12]を貰つた時と田畑氏が「鳥羽家の子供たち[13]」を出版したときと、どちらも記念のためである。賞品には、ツゲの駒と銀製のカップが贈呈されたが、前回では古谷氏が、次回では井伏氏が、それぞれ優勝の栄誉をになつた。

賞品授与式は一同拍手の裡に行はれたが井伏氏も古谷氏もひどく嬉しさうな顔をしてゐた。この阿佐ケ谷会と文芸物を専門に出版してゐる竹村書房チームと、一度将棋の試合をしたことがある。場所は四谷の某料亭であつた。敵方は坂口安吾氏や菱山修三氏などを擁してゐて、下馬評では味方が劣勢といふことであつた。しかし、いよいよ総当りの形式で手合はせをしてみると、まるで鎧袖一触、問題にならなかつた。

井伏氏が、われわれヘボ将棋の仲間で、最も強いことは前述した通りであるが、棋風（？）は小説とちがつて別に天才的といふわけではない。どちらかといへば体力的乃至は生理的である。井伏氏は将棋を始めると、決して二、三番でやめる事がない。少なくて十回、多い時は二十回位指すのが普通である。夜半からさし始めて徹夜のうへ、翌朝までさしぬく位は、しやれをい

うわけではないが、朝飯前といふところである。相手は始め優勢であつても、これでは途中で疲れてきて、最後の記録では結局負けといふことになつてしまふ。いち度などは、まだ若い人が氏の相手をしたが、体力戦に負けてま夜中「もうかんべんして下さい」と、ほんとうに泣き出したさうである。これは文章を面白くするための修飾や、井伏氏をひやかすための誇張では決してない、氏の奥さんから直接きいた話である。

将棋が流行してゐるのは、若い男の作家の間ばかりではない。女の作家でも、宇野千代、美川きよ、阿部艶子などの諸氏はそれぞれ一応の棋客である。技倆は問題にならないが、中では宇野千代さんが最も強い。だいたい勝負ごとに熱中する性格らしく、往来を散歩してゐる時でも、同伴者に戦ひを挑むことがある。附近の喫茶店で一席やらう、といふのである。さういふ時はたいてい通りすがりの玩具店で紙製の盤を買つて、店へもち込むのが普通である。宇野さんの将棋はその人の生き方と同じで、とても生一本で情熱的で愉快であるが「まつた」が多いのには少々閉口である。宇野さんを将棋にそんなに熱中させた一半の責任は、小田嶽夫氏が負はなければならない。まだ未熟だつたころ、一度宇野さんの家で将棋の会を開いたことがある。席上男で宇野さんに負けたのは小田氏一人であつた。そのことが宇野さんの将棋熱に拍車をかけたことはたしかである。

他人のことばかりいひつゞけてきたが、最後に自分のことをいはないと、不公平になる恐れがある。かういふことで自己を語るのは、僕には私小説を書くのより苦手なのであるが、正直に言はなければならないであらう。

思ひきつて言ふが、阿佐ケ谷会で最下位の地位をしめるのは僕である。昔は小田氏が好敵手であつたが、どういふものか芥川賞[14]をもらつた翌日から、小田氏の棋風は急に颯爽としてきて、それ以来僕が不名誉な境遇を甘受しなければならなくなつた。さきごろ、僕に召集令が降つた。持病のために不名誉の即日帰郷の命令をうけなければならなかつたが、あとで小田氏の告白によれば、僕が出征しては彼自身が僕の地位に転落するといふので非常な精神的打撃をうけたさうである。

僕とてうどいゝ相手は、木山、田畑、亀井、太宰などの諸氏である。木山氏や田畑氏は、人間が観念的に出来てゐるせゐか、思案がながいので閉口する、僕がまけるのは、たいてい相手の長考に焦れたり、腹を立てたりする時である。太宰はその人間や作風がさうであるやうに、駒の動きが実に飛躍的でまた、奇手縦横で目まぐるしい[15]棋界（？）に於ても、浪漫派であるが、あまり強いといふわけにはいかない。

しかし、なにごとでもさうであるが、下には下がゐるものである。さきごろ僕は森近素行、内藤健一郎の両氏を相手に交互

に二十番指しぬいたが、十九勝一敗といふ好記録を樹立した。森近、内藤の両君は雑誌「藝術科」の将来有望な同人であるが、将棋の方は決して有望といふわけにはいかない。むしろはなはだ悲観的である。

若い作家達の将棋熱にそゝのかされたのであらう。いちどなどはあの勝負事のきらひな坪田譲治氏にまで戦意やゝ動いたかの観を呈したことがあつた。挑まれて僕は二度ばかり相手をしたことがあるが、論外であつた。弱いのである。氏は人柄がさうであるやうに、指し方も善良で、気が弱く、まるで戦闘意識が稀薄なやうに感じられるので、こちらで十分いたはらなければ、すまない気もちになつてくるのである。

指してゐて気もちがいいのは三好達治氏である。棋風（？）が堂々としてゐるうへに、勘のいゝ将棋だから、駒の動きが早くて、その速度的快感が僕には手頃なのである。然し強いので、めつたに勝つことはできない。三好氏と井伏氏とは好敵手の模様である。

僕は自分よりか強い人と、精いつぱいに戦ふのがすきである。負けるとくやしいので、勝つまで戦ふつもりでぶつつかつてゆく[16]。そして結局は負けつゞけるのであるがそれはてうど、駄作ばかり書いてゐながら、傑作を夢みて、なにか眼には見えないものに挑闘してゆくのに事情は同断である。

いちど井伏氏を体力戦で負かして、泣かしてみたい、といふのが棋道（？）に於ける僕の最高の理念である。

本作は戦中の阿佐ヶ谷将棋会の姿をリアルタイムで活写している点で、井伏鱒二のいくつかの随筆や木山捷平の日記を没後にまとめた『酔いざめ日記』（講談社、一九七五年）と並んで貴重な証言である。『文学アルバム』に収録された多くの随筆は、戦後に往時を振り返って描いたものが多い。

阿佐ヶ谷会の概容については『文学アルバム』の萩原茂による「解説　阿佐ヶ谷会の素晴らしき仲間たち」に詳しい。本稿では別の視点で初出稿を読み進め、注釈を加えたい。

ざっくばらんな随筆なので初出稿と『仕事机』収録稿にあまり違いはないだろうと予想して比較したところ、意外なことに、中村はかなり手を加えていた。文末に異同一覧を掲げるが、重要と思われる箇所は特に紹介する。

〈小田嶽夫氏と会つた時／「いつたい僕たちはなにを楽しみに生きてゐるのであらう」／と、いふ話がでた。（略）「そりやあ将棋があるからさ」〉というくだりは阿佐ヶ谷将棋会の自由闊達な雰囲気を象徴する。中村の師、井伏の随筆「縁台将棋」（『オール読物』一九三八年九月号[17]）にも同内容の一場面が登場する。

〈このごろ私は、ヘボ将棋に夢中になりすぎて仕事を怠ける傾向がある。過日、新進作家中村地平は私にかう云つた。／　われわれは、いま何を一ばんの楽しみに生きてゐるのだらう。この命題のもとに友人数名といろいろ検討してみたが、それは将棋ではないかといふ結論に到達した。／　これは中村地平の自嘲的警句だらう〉。「縁台将棋」の発表時期を考えると、これを受けて「将棋随筆」が書かれたのではないか。

〈先輩や戦友たちが戦場で血をながしてゐる非常の時代に、のん気な話題で大変申しわけもない〉という一節は、一九三七年七月七日の盧溝橋事件に始まった日中戦争の真っ最中という世相を反映している。実は中村の長兄で陸軍主計少尉（戦死後中尉に特進）の彦一は一九三八年五月二一日に中国戦線で戦死[18]し、彼は「戦死した兄」（『新日本』一九三八年一一月号）を書いた。〈のん気な話題〉を持ち出す裏には中村のその後の運命をも左右する悲劇があった。

〈常連の顔ぶれ〉では文人囲碁会（一九三八年創立）の有力な会員だった尾崎一雄に注目したい。尾崎は当時、下谷区（現台東区）上野桜木町在住。阿佐ヶ谷将棋会にまでわざわざ遠征していた。実力上位に名を連ねているのは意外だ。尾崎は志賀直哉に〈平手で、五度に一度位しか勝てない〉（志賀さんと将棋」『文藝春秋』一九三三年一一月）と書いている。志賀が強かったのか、阿佐ヶ谷会の面々が弱かったのか[19]。

顔ぶれ＝強さの順番は初出稿と『仕事机』収録稿では異なる。〈太宰治、小田嶽夫〉が〈小田嶽夫、太宰治〉と入れ替わっているのはささやかな謎だ。単に両者の棋力が逆転しただけなのか、太宰がらみで他意があったのか。

〈年齢や文学的経歴から云つてもこの仲間ではもちろん井伏氏が大将格であるが、将棋でもまた同様である〉の一節は初出稿のみで『仕事机』収録稿では削除された。

〈二回ばかり将棋の大会〉のうち〈井伏氏が直木賞を貰つた時〉の将棋会は一九三八年三月三日に開催。前述した最初の阿佐ヶ谷将棋会である〈田畑氏が「鳥羽家の子供たち」を出版したとき〉の将棋会は同年七月一二日に行われた。井伏は『新潮』（一九三八年九月）に載せた「日記四日間」の〈七月十二日〉の項にこの時のことを記している。『文学アルバム』には掲載されていないので当該箇所を紹介する。

〈午後、田畑修一郎氏の新著「鳥羽家の子供」出版記念会に出席した。出席者はみな将棋好きの人であつた。版元の砂子屋書房が銀の優勝カツプを景品に出して将棋をした。すなはちその顔ぶれから見て、阿佐ケ谷ヘボ将棋大会の観があつた。優勝カツプは私の手に落ちた。カツプには大きく「優賞」と隷書で刻み、小さく「『鳥羽家の子供』出版記念将棋会」と刻んであ

つた。純銀の立派すぎるほどのカツプである。これを瑠璃色のサツクに入れ、奉書で包み水引をかけ熨斗をつけ「優勝」と書いてあつた。砂子屋書房は手まはしよくかういふ賞品を用意して来たのである。〉

〈阿佐ケ谷会と文芸物を専門に出版してゐる竹村書房チームと、一度将棋の試合をしたことがある（略）敵方は坂口安吾氏や菱山修三氏などを擁し〉というくだりは特に興味深い。安吾は新潟中学の同級生が勤めていた竹村書房から第一作品集『黒谷村』（一九三五年六月）と長篇『吹雪物語[20]』（一九三八年七月）を出し、竹村の編集企画も手伝った。「将棋随筆」初出誌には竹村から出た中村地平の『戦死した兄』（一九三九年一月）、伊藤整の『石を投げる女』（一九三八年一二月）および真杉静枝の『小魚の心』（同）の広告が載っている。井伏、太宰ら多くの阿佐ヶ谷将棋会参加文士も竹村から出版した[21]。

文人囲碁会の常連だった安吾が参加した将棋の対抗戦について記録は三種あり[22]、内容が少しずつ異なる。すなわち（一）将棋随筆（二）村上護『文壇資料　阿佐ヶ谷界隈』（講談社、一九七七年）は、安吾の友人、若園清太郎の証言として四谷の料亭で阿佐ヶ谷チーム（安成、井伏、上林、木山、太宰）対本郷チーム（若園、菱山、鵜殿新一、安吾、真杉）（三）浅見淵『昭和文壇側面史』（講談社、一九六八年）は、四谷見附近くの長野屋という居酒屋の二階にて早稲田組（浅見ほか）対竹村書房組（安吾、若園ほか）。終了後、竹村書房の奢りで大酒宴――である。いずれも安吾側が負けた。正確な開催日は不明で阿佐ヶ谷会記録や井伏、安吾、太宰らの年譜からは抜け落ちている点も共通している。今回の初出誌判明により、（一）の時期は「将棋随筆」執筆の一九三八年一二月までと断定できる。

中村と安吾とはこれ以外にも将棋での接点がある。木山の「酔いざめ日記」の一九四〇年一月三日の項には〈坪田、小田、小生三人で中村地平訪問。坂口安吾も来ていた。将棋をさしたり、十二時近く辞去。（略）坂口と一勝一敗。中村と一勝一敗、小田と一勝、真杉と一勝であった〉。「将棋随筆」には登場しないが、真杉静枝にも触れておく。真杉はこの頃、中村と夫婦もどきの生活を営んでいた。中央線の北側、中野駅と東中野駅の間にあたる中野区上高田一丁目[23]の下宿の一階に中村が、二階に真杉がそれぞれ部屋を借りていたという。中村に一方的に惚れた真杉が押し掛けて、中村が住む下宿の空き部屋に強引に住み込んだらしい[24]。真杉は安吾との付き合いも古く、一九三三年創刊の同人誌『桜』の仲間だった。真杉の作品集『小魚の心』の「序」は安吾が書いた。

〈井伏氏が、われわれヘボ将棋の仲間で、最も強い（略）将棋を始めると（略）多い時は二十回位指すのが普通である（略）

相手は始め優勢であつても、これでは途中で疲れてきて、最後の記録では結局負け〉という部分は、『文学アルバム』の「序にかえて　お先にどうぞ」でも青柳いづみこが紹介している。青柳によると井伏は酒席でもゆっくりとしたペースでのみ続け子分たちが次々とつぶれていくのをながめつつ〈一人去り、二人去り、近藤勇はただ一人〉とうそぶいていられた〉という。井伏は作家としても先輩、同僚、後輩が次々とこの世を去る中で悠々と書き続けて九五歳で亡くなった。弟子中村が描く井伏の将棋は井伏の酒とのつきあいや作家人生と重なり合っている。

〈将棋が流行してゐるのは、若い男の作家の間ばかりではない〉として、将棋を指す女性作家して挙げられた三人は、『仕事机』収録稿では宇野千代のみが残された。中村は戦後の随筆[25]でも宇野と将棋の思い出について触れている。とりわけ印象深い一人だったのだろう。また、中村は宇野が待ったが多いと書きながら実は〈中村君は将棋をさすとき、よく「待つた」をした〉（井伏「亡友中村地平」〈『新潮』一九六三年五月号〉）というのはほほ笑ましい。宇野の将棋における好敵手だった真杉[26]に触れていないのは気になる。真杉は、中村より年上で離婚歴があり、しかも武者小路実篤と愛人関係にあったという。長兄が戦死し家督を継がざるを得ない立場にあった中村にとって結婚を考えられない相手だった。大学の機関誌に載せるため、真杉の名前を出すのを躊躇した可能性はある。

小田に勝ったことが〈宇野さんの将棋熱に拍車をかけた〉とある段落の末尾には、『仕事机』掲載稿で初出稿にはない一節が追加された。〈宇野さんに負けた話をもちだすと、どういふわけか小田君はまつ赤になつてしまふ〉は、小田に負かされた続けた中村のささやかな意趣返しだろう。

好敵手として〈木山、田畑、亀井、太宰などの諸氏〉からのくだりは二つの点で興味深い。まず〈太宰はその人間や作風がさうであるやうに、駒の動きが実に飛躍的でまた、奇手縦横で目まぐるしい〉は、太宰の〈小説の〉作風と棋風の相似を指摘した点。もう一つが「太宰」と呼び捨てにした点だ。初出稿を読んだ際は「氏」の脱字なのか意図的な省略なのか、にわかに判断がつきかねたが、『仕事机』収録稿と比較すると明確に後者だ。〈諸氏…木山氏…田畑氏〉は〈諸君…木山君…田畑君〉といずれも「氏」から「君」書き換えられたのに対して「太宰」は呼び捨てのままだ。実は中村は「太宰治へ」（『日本浪曼派』第七号〈一九三五年一〇月号〉＝『中村地平全集』未収録）という題名自体が呼び捨てである書簡形式の随筆をすでに書いていた。井伏が「亡友中村地平」で〈二人が顔を合せると、いきなり口論するようになつた。（略）そのいきさつについては中村君も太宰君も互に小説の形でかいてゐる[27]〉と記した関係が窺

える。ただし井伏の「日記四日間」の一九三八年七月一〇日の項には〈中村君や太宰君、塩月君が将棋をさしに来た〉とある。連れだって現れたのか偶然鉢合わせしたのかはわからないが、将棋を介した縁は続いていたとみえる。

「藝術科」同人の森近素行、内藤健一郎の両君に十九勝一敗だったという自慢話は初刊本では段落ごと削除された。内輪ネタなので不要と思ったのか、初出誌を読んだ本人から苦情が出たので削ったのか。

結びの〈いちど井伏氏を体力戦で負かして、泣かしてみたい、といふのが棋道（?）に於ける僕の最高の理念である〉といふ想いは果たして実現したのだろうか。中村は一九四一年一二月、太平洋戦争が始まった月に陸軍報道班員として師井伏らと共にマレー方面に派遣された。井伏はシンガポール市外の接収家屋の二階の広い部屋で中村と二人だけで寝起きした頃のエピソードとして〈私はボール紙で将棋の駒をつくつたが、中村君は将棋でなくて「コイコイ」の花札ならおつきあひしてもいいと云つた〉。結局、将棋も花札もやらなかったという。中村は井伏に負かされるのがいやだったのか、延々と続く体力勝負の将棋に付き合い切れないと思ったのか。心中はわからないが、「そりやあ将棋があるからさ」と仲間と異口同音に叫び合った日々が過ぎ去ったことを感じさせる。

中村は一九四二年暮れに帰国して間もなく、翌年三月に郷里宮崎の女性と見合い結婚。四四年三月には宮崎に疎開し、そのまま郷里で生涯を終えた。家を継ぐために東京に戻る選択肢はなかった[28]に違いない。兄がいたので疎開先の故郷青森から帰京した太宰とは対照的である。「将棋随筆」に描かれた中村や仲間たちの姿は青春の一瞬の輝きだった。

中村は戦後、兼業の地方作家として生涯を終えたため、その文学は道半ばとなった印象がある。一方では、宮崎県は文化振興のために得がたい人材を得たともいえる。

一九四六年には、地元の同人誌『竜舌蘭』の発行を引き継ぎ、自らも筆を揮うと同時に後進の育成にも取り組んだ。

坂口安吾は死の二ヶ月前の一九五四年一二月、取材のために宮崎を訪れ、旧友の中村と会った。「安吾新風土記」第一回「高千穂に冬雨降れり」（『中央公論』一九五五年二月号）には中村の名が記されている。ほかに宮崎の中村を訪れた文化人は、坪田譲治、金子光晴、椋鳩十、志賀直哉、里見弴、東郷青児ら。座談会や講演会、中村が書いた印象記は郷里に文化的な潤いを与えたに違いない。

中村の文学、事跡は近年新たに脚光を浴びている。「南方郵信」は『芥川賞候補傑作選　戦前・戦中編』（鵜飼哲夫編、春陽堂書店、二〇二〇年）に収録された。一九五一年制定の全

国的に珍しい図書館の館歌「宮崎県立図書館の歌」の黒木清次との共同作詞（園山民平作曲）は図書館開設一二〇周年の二〇二二年に話題になり[29]、同年春には、宮崎の有志による中村の足跡を伝えるドキュメンタリー映画の撮影が開始された[30]という。

折しも本年は中村地平の没後六〇年にあたる。再評価の兆しが感じられるなか、困難な時代を明るく生き抜こうとした文士たちを描いた「将棋随筆」ならびに彼の秀作が読み継がれることを願って結びとする。

初出稿と『仕事机』収録稿との異同

※初出稿→『仕事机』収録稿。①～⑰は段落。

①若い→わかい／非常な→たいへんな／流行して→はやつて／特に→とくに／甚だしく→ひどく／高円寺辺りに無数に→高円寺あたりにたくさん／青年作家のなかで将棋を指せないのは→青年作家のなかで、将棋の指せないのは／中谷孝雄氏一人→中谷孝雄君ひとり ②つい先達→ついせんだつて／小田嶽夫氏→小田嶽夫君／（一字下げ）「いったい僕たちは→（一字下げなし）「いったい僕たちは／異口同音に叫んだのは→同時にさけんだのは／（一時下げ）「そりやあ→（一時下げなし）「それや／大変→たいへん／先ずゴシップめいた僕たちの将棋熱→まず僕たちの将棋熱 ④若い→わかい／不定規→不定期／両氏→両君／太宰治、小田嶽夫→小田嶽夫、太宰治／亀井勝一郎　塩月赳などの諸氏→亀井勝一郎、塩月赳などの諸君 ⑤年齢や文学的経歴から云つてもこの仲間ではもちろん井伏氏が大将格であるが、将棋でもまた同様である。→（削除）／外村氏→外村君／引き受けてゐる→ひき受けてゐる／ならないであらう。時には飛び入り→ならないであろう。彼が幹事の地位を強調してゐるのは賢明といふよりほかはない。時には飛び入り／安成氏は別格で、われわれとはかなりの距離がある→安成氏は別格である ⑥田畑氏→田畑君／古谷氏→古谷君 ⑦古谷氏→古谷君／坂口安吾氏や菱山修三氏→坂口安吾君や菱山修三君 ⑧井伏氏が、われわれへボ将棋の仲間で、最も強いことは前述した通りであるが→井伏氏はわれわれへボ将棋の仲間ではもつとも強いのであるが／棋風（？）は→棋風は／決して→けつして／やめる事がない→やめた事がない／少なくて十回、多い時は二十回→少なくて十回多い時には二十回／夜半→夜なか／さしぬく位→さしぬくくらゐ／ほんとうに泣き出した→ほんたうに泣き出した／決してない、→決してない。 ⑨将棋が流行してゐるのは、若い男の作家→将棋が流行してゐるのは若い男の作家／女の作

家でも、宇野千代、美川きよ、阿部艶子などの諸氏はそれぞれ一応の棋客である。技倆は問題にならないが、中では宇野千代さんが最も強い→女の作家でも技倆は問題にならないが、宇野千代さんなどは一応の棋客といへよう／一席やらう、といふ→一席やらうといふ／少々閉口→少少閉口／小田嶽夫氏→小田嶽夫君／まだ未熟→宇野さんがまだ未熟／小田氏→小田君／そのことが宇野さんの将棋熱に拍車をかけたことはたしかである→そのことが宇野さんを有頂天にさせた。宇野さんの将棋熱に拍車をかけたことはたしかである。宇野さんに負けた話をもちだすと、どういふわけか小田君はまつ赤になつてしまふ。⑪小田氏が好敵手→小田君が好敵手／小田氏の棋風→小田君の棋風／小田氏の告白→小田君の告白 ⑫てうどい、→てうどい、／太宰などの諸氏→太宰などの諸君／木山氏や田畑氏→木山君や田畑君／出来てゐるせゐか→出来てゐるのだらうか／駒の動きが実に飛躍的でまた、奇手縦横で目まぐるしい棋界（？）に於ても、浪漫派であるが→駒の動きが飛躍的でまた、奇手縦横で目まぐるしい。阿佐ケ谷棋界に於ての浪漫派といふところであらうが ⑬しかし、なにごとも…悲観的である。→（段落ごと削除）⑭そゝのかされた→そそのかされた／戦意やゝ動いた→戦意やや動いた／感じられるので、→感じられる。／気持ちになつてくるのである。→気持ちになつてくるのである。これはかなはない。⑯負けつゞけるのであるがそれはてうど→負けつゞけるのであるが、それはちやうど／見えないものに→見えないのに ⑰僕の最高の理念である。→僕の最高の理念である。（十三年十二月）

---

1 一九〇八年二月七日～一九六三年二月二六日。本名は「治兵衛」。『日本近代文学大事典』（講談社、一九七七年）は読みを「じへい」としている。旧仮名遣いでは「ぢへい」である。中村の「戦死した兄」には、兄から父宛の電報に〈ヂヘイモオシラセコウ〉、母宛の手紙に〈地平から東京の模様を知らした手紙受取りました〉とあることから「ぢへい」が本来の読みと考えられる。『放送用語参考事典（昭和31年版）』（日本放送協会放送文化研究所編、日本放送協会、一九五七年）の「第1部　発音・アクセント」には〈ナカムラ・ジヘイ　中村地平／人名。×ナカムラ・チヘイ〉とある。「ちへい」は俗称か。

2 『日本近代文学大事典』、『太宰治大事典』（勉誠出版、二〇〇五年）、『坂口安吾大事典』（勉誠出版、二〇一二年）は「全五巻」としているが、第三巻の浅見淵の「解説」には〈中村地平全集全三巻が完成するに至った〉と明記。「全集」と銘打たれたが割愛された作品は多く、実質的には「選集」である。

3 阿佐ヶ谷将棋会としては一九四一年五月六日が最後。阿佐ヶ谷会は一九三六年四月が初回で、戦後は懇親会として存続。一九七二年一一

月二五日に終りを告げた。

4 日大芸術科は一九二一年に法文学部内に創設された美学科を源流として組織改編を繰り返した。『日本大学芸術学部百年史』〈日本大学芸術学部、二〇二一年九月〉には〈一九三三・一　芸術学園「芸術科」を創設〉とあり『藝術科』はその直前の創刊である。創刊当初から市販された同誌には、学科の存在を学外にアピールする目的もあったと推測される。

5 芸術科科長の松原寛は創刊号〈表紙に〈ヒットラー号〉と入った特集号〉に下記の「創刊の辞」を執筆。〈わが日本大学芸術科は、当初より皇道芸術の創造をその理想としてきた。（略）雑誌『藝術科』は此の新体制組織の事実上の機関誌として更生しなければならない。（略）茲に『藝術科』を解消して『新藝術』創刊の運びとなった〉。なお『新藝術』の終刊は一九四四年五月号（第四巻第五号）。

6 『日本大学芸術学部百年史』には年表の一九四一年一月の項に〈芸術科、「新芸術」を創刊〉とある以外、『藝術科』『新藝術』に関する記述は見当たらない。

7 日本近代文学館曽根博義文庫所蔵。

8 坂口安吾の「足のない男と首のない男」（『早稲田文学』一九四六年一〇月号）には〈中村地平の弟子の日大の芸術科の生徒〉との記述あり。

9 連載「卓上の虹」の一篇。

10 『仕事机』収録稿で〈不定期〉に修正。

11 初出稿では行末で読点〈、〉が欠落。『仕事机』収録稿で入った。

12 第六回直木賞（一九三七年下半期）「ジョン万次郎漂流記」（河出書房、一九三七年）。

13 正しくは『鳥羽家の子供』（砂子屋書房、一九三八年六月）。

14 第三回芥川賞（一九三六年上半期）「城外」は小田の（『文学生活』創刊号＝一九三六年六月）。受賞後、作品集『城外』（竹村書房、一九三六年一一月）に収録。

15 句点〈。〉が欠落。『仕事机』収録稿で入った。

16 初出稿、『仕事机』収録稿とも〈ぶつつかつてゆく〉。

17 『文学アルバム』より。

18 兄彦一の階級と死亡日は「戦死した兄」による。『中村地平全集』第三巻「年譜」に〈一九三七年八月…戦死〉とあるのは疑わしい。

19 尾崎が一九七二年一〇月一日付で贈られた将棋の二段免状は「「将棋作品をひもとく！〝読む将〟のススメ展」（町田市民文学館ことばらんど・二〇二一年四月二九日～六月二六日）で展示。

20 安吾と竹村書房との関係については、拙稿『〔資料紹介〕「吹雪物語」関連―未発表書簡・帯文・書評ほか―』（『坂口安吾研究』第五号・坂口安吾研究会運営委員会 編、二〇二一年三月）参照。

21 「将棋随筆」の〈常連の顔ぶれ〉で竹村から出版したのは、井伏『頓生菩提』（一九三五年）、古谷『文学紀行』（三八年）、浅見『現代作家三十人論』（四〇年）、尾崎『金柑』（四一年）、太宰『愛と美について』（三九年）、小田『北京飄々』（四〇年）、亀井『東洋の愛』（三九年）ほか。

22 拙稿「愛棋家坂口安吾（下）④⑨」（『将棋ペン倶楽部』第五八号、二〇二二年秋／第六八号、一七年秋）参照。

23 『雑誌年鑑』昭和十四年版（日本読書新聞社、一九三九年）・昭和十五年版（同、一九四〇年）による。

24 中村「発端」（遺稿＝『中村地平全集』未収録、『ポリタイア』第一〇号、一九七一年二月）、井伏「亡友中村地平」参照。

25 〈北原武夫君と結婚したころ、将棋をおぼえた。そのころ銀座で宇野さんにあったことがあったが、宇野さんは近所のおもちゃ屋で将棋盤を買ってくると、僕を中華料理屋にさそいこみ、さっそく勝負をいどんだものであった―。〉（「女流作家の思い出　宇野千代さん」（『毎日新聞北九州版』一九五三年一月＝『中村地平全集』第三巻より）。

26 宇野「家を持っている女　真杉さんへの御返事」（『読売新聞』一九三九年一二月二六日）＝将棋と文学研究会、二〇二二年七月二六日、矢口貢大「資料紹介・宇野千代「家を持つてる女　眞杉静枝さんへの御返事」」より。

27 太宰の自殺未遂騒動を題材にした中村の「失踪」（『行動』一九三五年九月号＝『中村地平全集』未収録）および太宰の「喝采」（『若草』一九三六年一〇月号）。

28 「戦死した兄」には〈除隊して帰ると、兄は都会に在るある会社に勤めた。しかし一年と経たないうちに郷家に呼びもどされた。そして家業を受け継がされることになつた。若かつた兄はまだ田舎に住む気にはなれず、郷里に帰つてからはいつも不機嫌な顔をしてゐた。そして商売の駈け引きや、人を使ふことになれることができないで神経衰弱気味になつてゐた。家族制度の犠牲者さ、休暇帰省する僕に兄は洩らすこともあつた〉とある。井伏の「亡友中村地平」には〈庄野潤三君が宮崎市図書館主催の講演会に行つて来て、ノイローゼで寝たきりの療養生活をしてゐるさうだと伝へてくれた。原因は、頭取の地位を追はれて銀行を人に取られたからである。それが宮崎の人たちの噂であつた〉ともある。「戦死した兄」の一節は、その後の作者自身の運命を暗示しているかのようだ。

29 「宮崎県立図書館　きょう開館120年　館歌に込めた、文化の発展」（『毎日新聞』西部夕刊、二〇二二年五月二八日付）。

30 「宮崎市出身の小説家　本県の文化振興に尽力／中村地平　映画で伝えたい／有志グループ撮影開始」（『宮崎日日新聞』朝刊、二〇二二年四月二〇日付）。

［将棋ペンクラブ・坂口安吾研究会］